

# 近眼芸妓と迷宮事件

夢野久作

青空文庫



俺の刑事生活中の面白い体験を話せて云うのか。小説の材料たねにするから……ふうん。折角せつかくだが面白い話なんか無いよ。ヒネクレた事件のアトをコツコツと探りまわるんだから碌ろくな事はないんだ。何でも職務しごととなるとねえ。下らないイヤな思い出ばっかりだよ。

その下らないイヤな思い出が結構。在ありきたり来の名探偵大成功式の話じゃシンミリしない。恐ろしく執念深いんだなあ。

それじゃコンナのはどうだい。どうしても目星が附かないので警視庁のパリパリ連中が、みんな兜かぶとを脱いだ絶対の迷宮事件が一つ在るんだ。所謂いわゆる、完全犯罪だね。そいつが事件後丸一年目に或る芸妓げいしやのヒドイ近眼のお蔭で的確に足が付いた。すぐに犯人が捕まつたつてえ話はどうだい。珍らしいかね。実はこれは吾々にとつちや実に詰まらん失敗談だね。探偵談なんていうのも恥かしいくらいトンチンカンな、単簡明瞭な事件なんだが……。なお面白い……ずるいなあ、とうとう話させられるか。

もう古い話だ。明治四十一年てんだから日露戦争が済んだアトだ。幸徳秋水の大逆事件の前だつけね。チツト古過ぎるかね。……構わんか……。

ずいぶん古い話だがこの事件ばかりは、どうしても忘れられない変テコな印象がハッ

キリ残っているんだよ。何故だかわからないが、メチャメチャになった被害者の顔とか、加害者の若い青白い笑い顔とか、その間に挟まった芸妓のオドオドした近眼とかいうものが、不思議なほどハッキリと眼に残っている。

話の筋道は頗る簡単だがね。ほかの事件と違って何だか、こう考えさせられる深刻な、シンミリしたところがあるように思うんだ。

事の起りは在り来りの殺人事件だった。

飯田町の或る材木屋の主人で、苗字は忘れたが金兵衛という男が、自分の家の材木置場で殺られたんだ。天神様の御縁日の翌る日だったから二十六日だろう。天気の良い朝だったつけが、行ってみると非道い殺され方だね。

五十恰好の禿頭のデップリした親爺で、縞の羽織に前垂、雪駄という、お定まりの町家の旦那風だったが、帽子を冠らないで懐手をしたまま、自分の家の材木置場から、飯田橋の停車場の方へ抜けて行く途中の、鋸屑のフワフワ積った小径の上に、コロリと俯伏せに倒れている……材木の蔭から躍り出た兇漢に、アツという間もなく脳天を喰らわされたんだね。額から眼鼻の間へかけて一直線に石榴みたいにブチ割られて、脳味噌がハミ出している。ちよつと見たところ、出血の量が非常に少ないと思っただが、顔の下の

湿った鋸屑を掘ってみると、下の方ほど真黒くドロドロになっていて、死後推定時間は十時間だったと思うが、倒れたまま、動かなかつたらしい。文句なしの即死だね。ところでそこまでは判明したが、その他の事が全くわからない。

その頃まではどこの材木置場にも木挽こびきが活躍していたので、現場の周囲が随分遠くまで新らしい鋸屑だらけだ。犯人もそこを狙って仕事をしたものらしく足跡が全くわからないのには弱ったよ。いくらでも足跡が在るには在るんだが、ハッキリしたのは一つもない。屍体しかいの近くに二個所ばかり強く踏み躪にじつてあるのが兇行当時の犯人の足跡もしかつたが、単に下駄じゃないという事がわかるだけで推定材料にはテンデならない。被害者の懐中物は無む尽じん講こうの帳面が二冊キリ。墓がまぐち口も煙草容いれもない。……という極めてサツパリした現場なんだ。

その時の現場に出張していた連中はかなり大勢だった。少々大袈裟だったかも知れないが、仕事が閑散だったせいだろう。最初にこうじまち麴町署から来た四五人のほかに警視庁の第一捜査係長、刑事部長、警部補、巡查、刑事が四人、鑑識課の二三人、警察医が二名、予審判事と書記というのだから、殆んど全国の警察でも一粒選よりの鋭い眼玉が、そこいら中を一生懸命に探しまわったもんだが、何一つ手がかりが見当らない。ただその後の屍体解剖

で、額にブチ込んだ兇器が厚さ一分位、推定一尺長さ以上の一直線の重たい物体であった。ちようど鉈なたの背中みたようなものだった。……という事が判明しただけだったが、しかもこの鉈の背中という説明のし方が、アトから考えるとドウモ面白くなかったね。やはりこの事件を迷宮に逐おい込んだ原因になつていと思うんだ。長さ一尺以上、厚さ一分位の、一直線の重たい品物というので、みんな寄つて色々考えてみたが、前に鉈の背中という言葉聞いてたもんだから、それ以外の品物をドウしても考え付かない。まさかソソナ大きな文鎮ぶんちんが在ろうとは思わないからねえ。一直線の重たい、手頃の金属板……文鎮……製の凶屋と直ぐに思い付く程、頭のいい奴は実際にはナカナカ居ないものなんだ。探偵小説にはザラに居るかも知れないがね。そこで直接の証拠物件が見当らないとなると今度は情況の証拠という段取りになるだろう。

金兵衛の女房、店の番頭、若い者なぞを、手を分けて調べてみると、金兵衛は昨日きのうの夕方、夕飯を喰つてから、本郷の無尽講の計算に行つて来ると云つて、預つていた旧式の帳面と、九百円ばかりの金を店の金庫から取出して、イクラか這はい入いつた墓口と一緒に懐中ふところに入れた。落さないように懐手ふところをしながら、帽子も何も冠かぶらないままブラリと表口から出て行つたのを、女房と番頭が見ておつた。それつきり昨夜ゆうべは帰つて来なかつたが、毎

月二十五日の無尽講の計算の日には、そのままどこかへ行ってしまった、帰って来ないのが通例になっていたから、みんな早く寝てしまった。

あくる朝……つまりその二十六日の朝になって、番頭と若い衆が、その日の中に深川の製材所から河岸かしに着く筈になっていて、樅板もみの置場を見に行くと、直ぐに屍体を発見して大騒ぎになった。殺されるような心当りは一つもない……という至極アツサリした話……。

むろんそれから家内中の者を綿密に調べてみたが、怪しい者なんか一人も居ない。女房は締り屋の堅造かたぞうで、一高の優等生になっている柔順わとよなしい一人息子の長男と一緒に、裏二階で十時頃まで小説を読んでいたが、怪しい物音や叫び声なんか一度も聞かなかつた。又若い番頭は、店の表二階で焼芋を買って、十時過まで猥談をやっていたので、尚更、何も聞かんという訳でね。みんな今でいう現場ア不在証明リをチャンと持っている。金兵衛は相当ケケケチした親方らしいが、それでも人使いが上手うまかつたのだろう。怨んでいる人間なんか一人も居ないらしいのだ。

コイツは又迷宮入りかな……といった感じが、そんな取調とりしらべの最中にピンと頭へ来たがね。

しかし何しろ九百何円の金がなくなっている以上、殺人強盗という見込みなんだから事

が重大だ。しかも、よつぽど前から金兵衛の日常の癖や何かを研究して知っている人間で、相当の腕力と元氣のある奴だ。殊に日が暮れているとはいえ人家や、電車道に近い薄明るい処で、これだけの思い切った仕事を遣<sup>や</sup>つ付けている以上、生やさしい度胸ではない。事によると前科者かも知れない……という理窟から遠い親戚や無尽講の關係者、又は九段下界隈の前科者や無頼漢<sup>ごろうつき</sup>なぞを出来るだけ念入りに洗つてみたが、これとても疑わしい奴は一人も居ない。その中でも、二十五日の晩に、湯島天神の境内に集まっていた無尽講の世話人連中は、肝腎の帳面と金を持つている金兵衛が来ないので、その晩の九時頃になって、飯田町の金兵衛の家に電話<sup>うち</sup>をかけた。すると女房の声で、もう着く頃だという返事だったので、夜中過ぎる頃迄酒を飲みながら待つていたが、それでも来ない。そこでモウ一度電話をかけてみたが、今度は誰も起きて来ないらしいので、殺されているとは夢にも知らずに、明日<sup>あした</sup>、金兵衛の処に押しかけて行く事にきめて皆ブツブツ云い云い帰つて寝た。大方金兵衛は九百円の金を、ほかの事に廻わしたので、金策に奔走したままどこかへ引つかかっているんじゃないかと云う者も居たが、イヤ、金兵衛さんはお金の事ばかりはトテモ几帳面だから帳面を預けたんだ。そんな事をする気づかいは絶対がない。どうもおかしい……と云う者も居た。すると又……イヤ、金兵衛はこの頃、築地のどこかに妾<sup>めかけ</sup>を置いてい



るといふ話だから何とも知れない、なぞ云う者が出来て来てワイワイ云い合いながら別れた……といふ腹藏のない連中の話なんだ。

ここで金兵衛の妾の話が出たので、直ぐに飛び付くように金兵衛の素行調べに移つた訳だが、その妾といふのは検番を調べてまわると直ぐに判然わかつた。芳町よしちようの芸妓げいしやで取つて二十五になる愛吉といふのが……本名はたしか友口愛子といつたづけが、去年……明治四十年の暮に金兵衛から引かされて、築地三丁目の横町で、耳の遠い養母おふくろと一緒に小さな煙草屋を遣つてゐる。二階が押入、床の間附の六畳で、下が店の三畳に、便所に台所といふ猫の額みたいな造作ぞうさくでね。引かされたといつても自前になつただけで、お座敷はやつぱり勤めさせられていた。稼ぎ高は時々金兵衛が来てキッチンキッチンと計算する。台所のコマゴマした買物帳までも調べるといふ。ナカナカ抜目のないガツチリした親爺だつたのだね。

ところが又その愛吉の愛子といふ女がイクラか馬鹿に近い位、溫柔おとなしい女なので、或る待合わかみの女将が不憫がつて、結局その方が行末のためだろうといふので、金兵衛に世話したといふ話だったが、非道ひどい奴で、金兵衛は愛子の人の好いのに付込んで、稼ぎ高を丸々取上る上に、お客まで取らせていたといふんだから呆れたね。算盤そろばんの強い奴には敵かなわない

ね。

それから今度は搜索の手が、愛子の素姓調べに移った訳だが、そんな細かいところは面白くもないし、本筋に関係がないからヌキにしよう。とにかく愛子は某富豪華族の御落胤で、お定まりの里子上りの養母に、煮て喰われようと焼いて喰われようと文句の云えない可哀相な身上であつた事。三味線も踊りも、歌も駄目で、芸妓としては溫柔し過ぎる事、縹緞は十人並のポツチャリした方で、二十五だというのにお酌みたいに初々しい内気な女であつた。それにチョツトわからないが、非道い近眼だつたこと……これが一番大事な話のヤマなんだが、その近眼で人の顔をジイツと見る眼付が又、何ともいえず人なつっこい。見られた人間は、ちよつと惚れられているような感じを受ける事……アハハ。馬鹿にしちやいけねえ。俺が自惚れた訳じゃねえんだ。誰にもそう思われたんだよ。

それよりも事件発生以来、毎日毎日警視庁の無能を新聞に敲かれながら、ジイツと辛棒して、こうした余計な事をジリジリと調べてまわる俺達の苦労が並大抵じゃなかつた事だけは同情してもらいたいね。新聞記者なんてものは、そんなところにはミジンも同情しないからね。読者を喜ばせるのが商売だから、むしろ「警視庁の無能曝露」とか「犯人の大成功」とか書きたい気持で、まだですかまだですかと様子を聞きに来るんだからウ

ンザリしちまわあ。イヤな商売だよ。全く……。

ところが又、生憎あいにくな事にこの事件が、だんだんと新聞の註文に嵌はまりそうになって来た。この筋を辿つて行けばキット何かにブツカルに違いないという、俺一流のカンが当つていたかいなかったか、愛子には今まで一人の情夫らしいものも居ない。念のために今までのお客の中で、好いたらしい事を云い合つた者は居ないか。チョット惚ぼれでもいいから居ないかと聞いてみたが、愛子はただポカンとして頭を左右に振るばかりだから、しまいはこつちが負けてしまった。頭の悪い奴はコンナ場合全く苦手だよ。殊に女にはコンナ種類の返事をする者が多いから困るんだ。

実は愛子が惚れた男がチャント居たんだ。愛子はその男に、生れて始めての恋を感じているにはいたんだが、タツタ一晚、会つたキリだし、気の弱い女だもんだから自分でもチョット惚れのつもりでほかの苦勞に紛れて、そのまんま忘れていたんだ。むろん其そいつ奴が犯人だつたのだが……まあ……急せかずに聞き給え。ここが面白いところなんだ。

そんな訳で事件当時の愛子には、これぞという心当りが全くなかつたんだから手の附けようがない。そうかといって愛子の取つたお客を一々調べ上げて、足を洗つてみるというのはトテモ大変な仕事だし、第一、それほどの確かな見込を附けていた訳じゃないんだか

ら、そのままこの方面の搜索を打切る事にした。

そうなると自然、搜索の方針が八方塞がりになる訳だから、話が一番最初のところへ逆戻りして来る。つまり否が応でも兇器を発見して、その兇器から当りを付けて行かなければならない事になって来たが、その肝腎要の兇器が、事件発生以来どうしても見付からないのには弱らされたね。弱るも道理か……犯人はその兇器の文鎮をチャンと仕事場に持って帰って、ニツケル鍍金を仕直して、毎日毎日製図の仕事に使っていたんだから、コレ位馬鹿馬鹿しい話はないんだが、こっちはソナ事とは夢にも知らない絶体絶命だ。頼みの綱はコレ一つ……兇器さえ見付かればこっちのもの……東京市中を持ちまわって、一軒一軒虱潰しに出所を調べてまわっても構わない覚悟で、飯田町一帯の材木置場の隅から隅まで鋸屑を掻きまわしたもんだ。

笑い事じゃないんだよ。一口に迷宮事件というけれども、迷宮事件の裏面にはコンナ苦労がドレ位積み重なっているか知れないのだよ。しまいには九段下から大手あたりのお堀へかけての大搜索まで遣ってもらったが、古バケツ、底抜け薬罐、古下駄、破れ靴、犬猫や、傘の骨以外には何一つ引つかかって来ない。新聞にはその大搜索の状況を写真にまで出したが、吾々はただ、そうして笑われているような気がしたばかりだった。

とうとう事件発生後、三個月目に完全な迷宮入り、搜索打切の宣告を聞いた時の残念さ、無念さ……それは絶対にお役目氣質かたぎとか何とかいうもんじやなかったよ。吾々仲間の根性とてもいおうか。事件の筋道が尻切しりきりトンボになつて、有耶無耶うやむやになつた不愉快さといつたらないね。家へ帰つても二三日は飯が不味まずくて嬢かかあを相手に癩癩かんしゃくばかり起していたもんだが……むろん初めの騒ぎが大きかっただけに、警視庁が新聞からメチャメチャに野次り倒された事は云う迄もない。しかし事實は文字通りに「警視庁の無能」「犯人大成功」なんだからチューの音ねも出なかつた訳だよ。

ところが、こうした徹底的な迷宮事件……手がかりのなくなった完全犯罪が、それから一年も経つた後のちに、思いがけない愛子の非道ひどい近視眼のお蔭で目星が付いたんだから皮肉だろう。

不思議……そうだねえ。ちよつと聞くと、ずいぶん不思議な、神秘的な話に聞えるだろう。ところが事實は何でもない。何ともいえない人情に絡んだ憐れな話なんだ。

ちようどそれから丸一年経つた明治四十二年の、やはり四月の中頃の事だった。むろん次から次に起る事件に逐おわれて、金兵衛殺しなんか忘れている時分だったが……。

雨はシヨボシヨボ降るし、事件も何もなし……というので、仲間と一緒に警視庁の溜り

で雑談をしていると、給仕が面会人を取次いで来た。

「築地の友口愛子……大至急お眼に掛りたい……」

と云つて小さな名刺を一枚渡した。

トタンにドキンとしたね。一年前の苦心をズラリと思い出しながら慌てて立上つたよ。コンナ場合に、コンナ調子でヒョッコリ面会を求めに来る事件の中の女は十中八九、何かしら重大な手がかりを持つて来るものなんだ。

仲間に冷やかされながら例の面会室に来てみると、疑いもない愛子がチャント丸鬚まるまげに結つた野暮やぼつたい奥様風で、椅子に腰をかけている。よほど心配な事があると見えて、顔色が真青まへに裏やつれている。おまけに妙にオドオドした眼付でこつちを見る表情に、昔のよう  
な人なつこい愛くるしさがアトカタもないようだ。

占しめた……と思ひながら何喰わぬ顔で話を聞いてみると、愛子は金兵衛に死別しにわかれてから、芸妓げいしやを廃業やめて、義理の母おふくろ親と一緒に煙草屋専門で遣つてみた。すると近所の会社員や、工場の職人たちが盛んに買いに来ってくれるので、結構やつて行ける事がわかった。しかし一方に養母おふくろが、芝居と、信心と、寢酒の道楽を初めて、死んだ金兵衛の伝でグングン臍へそくり繰くりをカスリ取る上に、良い縁談をみんな断つてしまうので、愛子は朝から晩まで

店の稼ぎと所帯の苦勞に逐おわれて、この頃はスツカリ寔やつれてしまった……というような話で……つまり愛子は生れてから死ぬまで絞り取られるように出来ていた女なんだね。……それから愛子はオズオズと一通の手紙を出して、これを読んでくれと云うんだ。

俺は何かの脅迫状じゃないかと思つて半分失望しいしい、その手紙を開いてみたら大違いだった。便箋三枚に製図用の紫インキで綺麗に、細かく、ベタ一面に書いてあるんだ。参考品の中に保存してあるがね。見せてやろうか……ウン……こつちへ来てみたまえ。この手紙だ。

「前文御めん下さい。僕は貴女あなたに感謝しなければなりません。昨日きのう偶然に僕と、貴女とあすこで二人切きりになつた事を、貴女は記憶しておられるでしょう。あの時、貴女の横に腰をかけていたのは警視庁の思想犯係の刑事だったのです。そう気付いた時に僕はモウ絶体絶命の立場にいる事を知りました。貴女の前の御主人の事を根掘り、葉掘り聞いた僕の顔を貴女は記憶しておられる筈でしたから。

そればかりでなく僕は、貴女が苦勞に寔やつれておられる姿を見てシミジミと自分の罪を思い知りました。すぐにも名乗ろうかと思ひながら躑ちゆうちよ躑ちよしておりましたが、その時

に貴女は以前の通りの愛情の籠った眼でジイツと僕を見られただけで、そのまんま知らん顔をしておられました。貴女が僕に、どうかして無事に逃げてくれと云っておられる無言の気持がよくわかりました。

ああ。あの時の気持。僕の感謝の気持を、どうしたら貴女にお伝え出来ましょう。

貴女の前の御主人金兵衛は悪魔だったのです。貴女のそうした涙ぐましい純潔な心ばかりでなく、貴女の清浄な肉体、血液までも絞りつくそうとしている悪魔だったのです。ですから僕は、あの悪魔を懲らして貴女を救い出し、同時に僕の外国行の旅費を作ろうと決心してしまったのです。それから一ヶ月ばかりの間金兵衛を跟けまわして、とうとう完全なチャンスを手に入れたのです。しかし外遊はしませんでした。金兵衛から奪ったお金は皆、党の運動資金に費つてしまいました。

僕は貴女のお思想から見ればドンナに咀わられても足りない人間です。貴女の御主人の仇敵です。社会の公敵です。貴女の不運の原因を作った人間です。それを貴女は知らん顔をして見のがして下すつたのです。

ああ。貴女はあの、タツタ一夜の純情を、一年後の今日までも僕に対して注いで下すつたのです。僕を愛して下すつたのです。



僕は生れて初めて貴女によって人間の純情の貴さを知ったのです。唯物主義一点張ぱりの血も涙もない生涯を送ろうと思っていた僕の信念が、貴女のお蔭で根柢からグラ付き初めたのです。

僕はキチガイになりそうです。

僕はモウ二度と貴女にお眼にかからない処へ逃げて行きます。裏切者にならないために、貴女の純真な、切ない愛情をタツタ一つ抱いて、満まん腔こうの感謝を捧げて死んで行きたいために。

僕は裏切者となつて、貴女と結婚して、貴女をエタイのわからない不幸な運命に陥れるに忍びません。

どうぞ幸福に幸福に暮して下さい。

淋しい社会主義者より

友口愛子様

この手紙は直ぐに焼いて下さい。貴女の御親切に信頼します。

この手紙を読み終ると直ぐに、これは一刻も猶予ならんと思つて立上りかけた……が……

…又思い直して腰を落付けた。この手紙を持つて来た愛子の態度が、あんまり不思議なので……自分に好いている男を一人死刑にするような遣り方なのに……正直者の愛子がソナ残酷な事をする筈はないと思つたので、念のために今一度訊問してみる氣になつた。社会主義者一流の計略じやないかしらんとこの疑いも起つたからね。

「ふうむ。愛子さん……」

「ハイ……」

「あんたはこの手紙の主ぬしに心当りがあるのかね」

ビツクリしたように眼をパチパチさせた愛子は丸鬚を軽く左右に振つた。

「いいえ。ちつとも存じません。何を書いてあるのか読めないものですから。字があんまり細かくて……」

俺は唾然となつてしまった。

「ナアಂಡ。まだ読んでいないのかい」

愛子は丸鬚に手を遣りながら淋しく笑つた。

「ハイ。コンナような手紙が、よく男の方から参りますので、そのたんびおつかさんに母親おつかさんに読んでもらつておりますが、この手紙の文句ばかりは、わからないと母親おつかさんが云うもんですから

……処々拾い読みしてもらつてもチンプンカンプンですから……ただ金兵衛さんの名前が所々に書いてあつて、社会主義者が死ぬつていうような事が書いてあるつて云うもんですから、何だか怖くなりました……ほかの方に読んで頂くのは劍呑だつて母親が云うもんですから、大急ぎで貴方に読んで頂きに……」

俺は思わず一丈ばかりの溜息を吐いたよ。滑稽な気持ちなんかミジンも感じなかつたら不思議だよ。これ程の恐ろしい作用を現わした愛子の、何も知らないでオドオドしている近眼を暫くの間茫然と見詰めていたね。

「ふうむ。あんたはこの手紙で見ると、金兵衛さんが死ぬる一ヶ月ぐらい前に、どこかの待合で、若いお客と差してシンミリした事があるんだね」

愛子の顔色が見る見る真青になつた。この前に訊問した事をドウやら思い出したらいいんだ。それから又、忽ち耳の付け根まで赤くなつたが俺の顔を見ながらオズオズと点頭したものだ。

「ね。あるだろう。思い出したろう」

愛子はいよいよ真赤になつて俯向いてしまつた。俺は胸をドキドキさせながら彼女に対して訊問の秘術を尽し初めたが、彼女は手もなく釣り込まれてポツポツ話し出した。

「ハイ。やつと思い出しました。それは二十七八の若旦那風の人でした。待合では才おさんと云っておりましたが、お名前は大深さんと云いましたか……お召物からお金遣いまでサツパリした方で、いいえ。手は両方とも職工らしくない、白い綺麗な手でした。お酒が少しばかりまわりますと、親切に色々あたしと妾のみのうえ身上をお尋ねになりましたので、何もかも真ほん個との事をスツカリ話しました。金兵衛さんの事までもスツカリ……毎月二十五日が本郷の無む尽じん講かんの寄合なので、帳面とお金を持って行かれる。その帰りに電車あたしで妾あたしの所へ見える事まで話しました。その若い方は何でも、信州の或るお金持の御養子さんで、東京へ来て高等工業学校へ這入ったが、養家が破産したために学校へ行けなくなつた。それから色々苦勞をして稼かせぎながら、築地の簿記の夜学校へ這入っているうちに、半年振りに養家の残りの財産が自分のものになつたから、煙草をかうたんびに思っていた君を名指しにして遊びに来た。これから時々来るから……といったようなお話で、お宅は芝の金杉という事でしたが……それはそれは御親切な……」

「……ふうん。それから、シツポリといい仲になつたつて訳だね」

愛子は又耳元まで赤くなつた。涙を一しづくポロリと膝の上に落した。

「うんうん。わかつているよ。だからあの時も、そのお客の事を俺に話さなかつたんだね」

愛子は丸鬚を、すこしばかり左右に振った。シクリシクリと戯り上げ初めた。

「そうかそうか。そのお客だけがタツタ一人好いたらしい人だった事を、あの時は思い出さなかつたんだね」

愛子は微かに震えながら頭を下げた。多分謝罪あやまっているつもりだったのだろう。俺は一膝乗り出した。

「そこでねえ。話は違うが、昨日きのうアンタはどこか、電車か何かの中で三人切りになった事があるかね。ほかの二人は男だった筈だが……」

愛子はビツクリしたように顔を上げた。

「どうして御存じ……」

「アハハ。この手紙に書いてあるじゃないか。どこだい、それは……」

「昨日きのう、伯父さんの法事をしに深川へまいりました」

「アツ。月島の渡船わたしに乗ったんだね。成る程成る程。その時にアンタと一緒に乗っていた二人の男の風体ふうていを記憶おぼえているかね」

愛子は恐ろしそうに身体からだを竦すくめた。俺が社会主義者の事でも調べていると思ったんだろう。例の黒眼勝くろめがちの眼をパチパチさせながら唇を震わした。

「妾は眼が悪う御座いますので、三尺も離れた方の風体はブーツとしか解りませんが……」  
「わからなくともいいからアラカタの風采でいいんだ。二人とも紳士風だったかね」  
「いいえ。一人は青い服を着た職工さんで、もう一人は黒い着物を着た番頭さんのような方でした」

「その職工みみたいな男の人相は……」

彼女ははいよいよ恐ろしそうに椅子の中に縮み込んだ。

「あの……鳥打帽を……茶色の鳥打帽を眉深く冠まぶかつておられましたので、よくわかりませんでした、モウ一人の方はエヘンエヘンと二つずつ咳払いをして、何度も何度も唾をお吐きになりました」

「アハハ。そうかそうか、それは色の黒い、茶の中折なかおれを冠かぶつた、背の高い男だったろう。  
金縁きんぶちの眼鏡をかけた……」

愛子はビツクリして顔を上げた。

「……どうして……御存じ……」

俺は直ぐに呼鈴よびりんを押して給仕を呼んだ。

「オイ。給仕、控室の石室君いしむろにチョット来てもらってくれ」

「かしこまりました」

石室刑事は直ぐに來た。

「何だ何だ……ウンこの婦人かい。昨日きのう月島の渡船場わたしで一緒に乗ったよ。どうかしたんかい……ナニ。一緒に乗った職工かい、ウン知ってるよ。深川の紫塚むらつか造船所の製図引で大お深泰おふかたいぞう三という男だよ。社会主義者の嫌疑で一度調べた事がある。高等工業にいたとかいうがチョットお坊ちゃん風のいい男だよ。昨日きのうは俺の顔を見忘れていたんだろう。知らん顔をしていたつけが」

正直のところ、この時ぐらい狼狽した事はなかったね。社会主義者なんていうのは、見掛によらない敏感なもので、逃足の非常に早いものだという事がこの時分からわかっていたからね。

「ウン直ぐに行こう。重大犯人だ。君も一緒に来てくれ。詳しい事はアトから話す。アツ……いけない。愛子さん愛子さん」

愛子はウンと氣絶したまま椅子から床の上へ転がり落ちてしまった。残忍な話だが、俺はその時に思わず微笑したよ。この氣絶は彼女の話の真实性を全部裏書きしたようなものだったからね。

警察医が来て愛子を介抱している間に、俺達は紫塚造船所に乗込んで、机の曳出ひきだしを片付けている最中の大深を、有無を云わさず引つ捕えた。大深はその頃芽生えかけていた社会主義者のチャキチャキで幸徳秋水の崇拜者だった。目的のためには手段を択まずという訳で、露西亞ロシアへ行く旅費を得るために、製図屋仲間の評判から愛子の旦那の金兵衛に眼を付けて、愛子の口から様子を探ると、仕事用のニツケル鍍金めっきの四角い鉄棒を持って熱心に跟つけまわしている中に、屏風びょうぶを建てまわしたような材木置場で、絶好の機会に恵まれたので断然、絶対安全な兇行を遂げたんだね。

しかし大深はタツタ一度の馴染なじみなもんだから愛子の近眼に気付いていなかったし、愛子の方も、そんな事までは打明けなかつたんだね。だから愛子の例の通りの潤んだ、惚れ惚れとした眼付きでジイツと見られた時に、スツカリ感違あやまいをしてしまったんだね。元来が主義にカブレた青二才で、ホントの悪党じゃなかつたもんだから、ほんの一時の自惚うぬぼれから身を滅ぼしてしまった訳だ。

手錠をかけたアトで例の手紙を見せると大深は、青い顔になつてうなずいた。

「馬鹿だなあ……この手紙を他人ひとに見せるなんて……もつとも俺の方がよっぽど馬鹿だったんだが……アハハハ……」



と空虚うつろな高笑いをしたつけ。実にサツパリしたい度胸だったが、聞いてる吾々は笑おうにも笑えない気持がしたよ。

むろん癩しやくに障さやっていたから大深の就縛は新聞社には知らせなかつた。そのまま暗やみから暗やみへと死刑になつてしまつたが、可哀そうなのは愛子で、それから後のちチヨイチヨイ大深へ差入れなんかをしていたらしい。そうして彼が死刑になつた事が新聞に出た晩に、自宅の台所くで首を縊くつて死んでしまつた。

遺書も何もなかつたので原因はわからないが、自分の口一つから金兵衛を殺し、又大深を殺した事がわかつたので、すっかり悲観して思い詰めてしまつたんじゃないかと思う。

何……君にはわかつている……？

愛子は最初、大深に初恋を感じていたのを自分でも気付かずにいたんだ。それがあの手紙を見て焦こげ付くほど燃え上つた。そうして大深の死刑と一緒にこの世が暗くら闇やみになつた。ふうん。恐ろしい間まだるつこい惚れ方をしたもんじやないか。惚れていた事がわかるまでに人間を二人も殺してさあ。

ふうん。ほんとうに純真な、内気な女なんてソナもんだ、そこがこの話のスゴイところだ……小説になるところだつていうのかね。

アハハ。  
成る程ねえ……。

# 青空文庫情報

底本：「夢野久作全集10」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成4）年10月22日第1刷発行

入力：柴田卓治

校正：ちはる

2000年12月18日公開

2006年2月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 近眼芸妓と迷宮事件

夢野久作

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>